教授業績外部評価の実施

一、経過

二〇〇一年二月八日教授会制定（二〇〇五年六月二三日・二〇一五年二月一九日改正）の「東京大学史料編纂所教授業績評価実施要領」にもとづき、二〇二二年度の評価対象となった杉本史子教授・本郷和人教授について、教授業績外部評価を実施した。

実施要領第六条・第七条・第八条に定める手続きに従い、二に掲げるそれぞれ三名の評価員を委嘱した。また両教授には、第五条に定める自己評価書等の提出を依頼し、これを各評価員に送付し、評価員には評価書の提出を依頼した。

今回、各評価員からの報告書の提出を受けて、第一〇条に定める報告書の概要を報告する。なお、本郷和人教授については、第七条二項の「所長が評価を受ける場合には、すでに評価を受けた教授に評価員の選定を委嘱する」の措置に准じ、評価員の選定、評価報告書の作成を、山家浩樹教授に委嘱した。

二、評価員の委嘱

（一）杉本史子教授

岩淵　令治（学習院女子大学国際文化交流学部教授）
高槻　泰郎（神戸大学経済経営研究所准教授）
平井　松午（徳島大学名誉教授）

（二）本郷和人教授

近藤　成一（放送大学教授）
佐伯　智広（帝京大学文学部准教授）
東島　誠（立命館大学文学部教授）

三、評価の概要

（一）杉本史子教授

教授任用後の研究業績、編纂・研究事業に関する業績を中心とし、重点の置き方に相違はありつつ、全研究歴、編纂・研究事業歴に関わる評価を各評価委員が行っている。

研究に関する業績

杉本教授は自身の研究テーマについて、「身分制社会における公とは何か」という問いを出発点として、江戸幕府評定所および絵図・地図という二つの分析対象へと考察を展開してきたと述べている。文字史料とともに絵図史料を扱い、研究の節目ごとに専門書を刊行するだけでなく、多様な分野の研究者によるプロジェクトを組織し、さらに積極的に国際発信を行うなど、精力的な取り組みを続けている。

まず評定所や裁判研究については、十八世紀末以降にとられた当座の解決をはかる「請証文」方式が、再論禁止の徹底が困難となった幕府による「判決の確定性を後退させる裁きの運用」であることを杉本教授が論証した点が、既存の法制史研究の理解を一新したものとして、高く評価された。杉本教授が、史料論的分析を精緻に進めることを通じて、裁きの実態や手続きを動態的にとらえ、裁きにおける「合理的な判断」も時代とともに変わり得ること、その執行力も絶対・不動のものではないことを示したことは、私的秩序と公的秩序の関係に注目する近年の経済学・経済史学の動向に照らしても重要な意味を持つことが指摘された。「公」概念についての、このような問題提起をめぐって、杉本教授は中国史などとの議論も行っており、日本近世史のみならず、他国史および社会科学研究全般に重要な一石を投じたと評価された。

杉本教授の研究においては「空間」という概念も、特筆すべきテーマだと

いえる。ある評価者は、江戸城の「境界空間」が、開門時には諸身分が往来し、城と都市との特質が重なり合う空間となって、「公儀」の社会的機能が実現する場となったという、杉本教授の指摘を取り上げている。人脈関係分析にとどまりがちな一部の政治史研究を超えて、徳川政権の政治空間を検討する杉本教授の方法が、「公」の特質を照射することに成功していると述べている。また別の評価者は、杉本教授のメディアへの関心に注目する。杉本教授が提示した、「官」ではない領域に開かれた商業出版物や情報伝達をあらわす「近世的公開メディア」という概念は、人々が国家や社会によって先験的に価値づけられた存在から、解き放たれた個人へと向かう過渡期的な性格を持つ近世社会における、新たな分析課題として重要な意味を持つという。

第二のテーマである絵図・地図研究に関しては、同分野を牽引し、学際的な共同研究を進めてきた点が、高く評価されている。杉本教授は多元的な視点からの史料分析を実現しており、「地図史料学」という新しい分野を開拓した。さらに複数の評価者が、近代移行期における「海洋知」についての研究に注目している。伊能忠敬の測量による「大日本沿海輿地図」（伊能図）が、開国後に、諸外国の地図などを参照しながら「官板実測日本地図」として刊行、世界に公開される経緯についての克明な検証は、幕末期の徳川政権下における世界認識をあきらかにし、近代移行期研究にあらたな論点をもたらしたと指摘されている。総じて絵図・地図について、モノとしての側面（材料や技法等）を検討する一方で、それを成立させている施政者の意図や社会的背景等を追求するという、杉本教授の複眼的アプローチが非常に効果的であると述べられている。

すべての評価者が、杉本教授の多分野の研究者との交流や組織力・国際発信力を称賛している。なかでも国際発信については、日本の歴史研究を国際的文脈に位置づけるうえで、極めて重要と述べられている。

編纂・研究事業に関する業績

杉本教授は史料編纂所の本務として、入所以来『大日本維新史料　類纂之部　井伊家史料』の編纂に従事してきた。同書を確実に刊行し、二〇一九年には半世紀に及ぶ刊行事業を完結させ、さらに完結記念のシンポジウムを主催して社会の共有財産へと高めたこと、並行して史料集の有効な活用のためのオンラインデータベースの充実をはかる科研プロジェクト「日本近世史料学の再構築」を進めていることが高く評価されている。さらに「赤門書庫旧蔵地図プロジェクト」などの、本所所蔵史料の整理業務と連携した研究活動は、所員としての本務と個人研究とを密接にリンクさせた、研究業務と個人研究との理想的な関係の構築であると指摘された。

研究・編纂の両面において、杉本教授には十分な実績が認められ、学界に大きく貢献していると、高く評価された。

（二）本郷和人教授

教授任用後の研究業績、編纂・研究事業に関する業績を中心とし、重点の置き方に相違はありつつ、全研究歴、編纂・研究事業歴に関わる評価を各評価委員が行っている。

研究に関する業績

本郷教授の研究業績の特徴として、時代は、古代から江戸時代に及んで近現代まで射程に収め、分野は、政治・軍事・経済・宗教・ジェンダーなど幅広い、という対象の広さがまず挙げられている。加えて、個別の事例を扱う際に、大きな歴史の流れの中に位置づけて評価する姿勢も指摘される。本郷教授の自己評価報告書で、自らの問題関心として、当為より実情を重視することと並んで、歴史事象を流れの中に捉えることと述べられているのと一致しよう。これら特徴の背後には、通説批判が表層の議論にとどまりがちなことを含め、研究が隘路に入っているという本郷教授の危機感があると指摘されている。

本郷教授は、おもな評価対象として、著作七冊、論文一本を挙げている。各評価者は、それらにつき、教授任用以前の研究業績の上に立つことを確認しながら、おのおの独自の分析を行い、いずれも高い評価を与えている。本郷教授の基本的視点は、『日本史のツボ』で示された七点（天皇・宗教・土地・軍事・地域・女性・経済）となろう。さらに、評価者の分析をもとに視角を三つにまとめてみると、第一は、国家の単一性の否定、第二は中世的イエの成立の重視、もしくは世襲の重視、第三に歴史が人間を作る、となろう

か。論文「王法と仏法」は第一の視角に立ち、問題提起的な論考として重要であると評価されている。『上皇の日本史』は第二の視角に立ち、通史的叙述とテーマ的叙述とが極めて高い水準で並立していると評されている。『北条氏の時代』は第三の視角に立ち、軍事に従事した武士が統治に向き合っていく様を叙述し、権力は法の拘束下にある、という「法の支配」の問題を明確に意識して論じた重要な著作であると評価されている。具体事例として徳政令を挙げた評価者は、徳政令をめぐる幕府の政策が二転三転する背景の分析は見事だと高く評価している。これら著作の先に、本郷教授の探求はどのように展開するのか、強い期待が表明されている。

やや懸念される点として、これら著作は、先行研究の吟味・批判の上に自説を展開するというスタイルを採らない場合が多く、中世史以外の叙述を中心に、研究史との関わりがわかりにくい個所が生じている、という指摘もなされている。評価者は、その要因を意欲的に幅広い分野・時代を対象として叙述を行ったことに求めつつ、一般の読者を想定した著作として重要な業績であることは変わらないと述べている。

編纂・研究事業に関する業績

本郷教授は、『大日本史料　第五編』の編纂に従事している。本郷教授は、自己評価報告書のなかで、大日本史料の基本とする網羅主義についての疑義に言及している。この点に関して、評価者から「効率の悪い仕事を地道に続けることの大切さ」が述べられ、関係史料の博捜が史料発掘につながると指摘されている。第五編の次冊は、建長四年前半で、藤原道家死去、宗尊親王将軍宣下など、この時期の一つの節目を迎える。評価者からは、本郷教授に、道家研究の第一人者としてその伝記編纂に関わることをはじめ、大きな期待が寄せられている。また、本郷教授の教育に対する貢献には、生涯教育も含め、高い評価が与えられている。

総じて、本郷教授には十分な実績が認められると評価されており、とりわけ社会貢献の点で高い評価が与えられている。

四、研究業績自己評価

杉本史子教授自己評価書（二〇二二年六月）

一　経歴

生年　一九五八年六月

学歴　一九八一年三月　山口大学　文理学部　文学科　国史学専攻卒業
一九八三年三月　岡山大学大学院　文学研究科　史学専攻卒業
一九八六年三月　神戸大学大学院　文化学研究科　社会文化専攻単位取得退学

職歴　一九八六年四月　東京大学史料編纂所　助手
一九九七年七月　同　助教授
二〇〇七年四月　同　准教授（職名変更）
二〇一一年七月　同　教授

学位　二〇〇〇年六月　博士（文学）（東京大学）

二　研究業績一覧

単著については著者名を省略する。『領域支配の展開と近世』『近世政治空間論』『絵図の史学』に収録されたもの（改訂分を含む）には、それぞれ、矢印と1・2・3を付した。

二・一　教授任用後の業績

〔著書〕

杉本史子、礒永和貴、小野寺淳、ロナルド・トビ、中野等、平井松午編『絵図学入門』（東京大学出版会、二〇一一年七月）

『近世政治空間論―裁き・公・「日本」』（東京大学出版会、二〇一八年八月）

『絵図の史学―「国土」・海洋認識と近世社会』（名古屋大学出版会、二〇二二年八月）

〔編著〕

Karen Wigen, Sugimoto Fumiko, and Cary Karacas ed. *Cartographic Japan:*

A History in Maps（The University of Chicago Press, 2016）. また、下記の記事を執筆した。「1章イントロダクション」「同エピローグ」「Fixing Sacred Borders: Villagers, Monks, and Their Two Sovereign Masters」「Visualizing the Political World :Through Provincial Maps」

〔論文〕

「都市空間のなかの江戸城」（『東京大学史料編纂所研究紀要』二二号、二〇一二年三月）

「近世日本裁判再考—社会と裁判」（人間文化研究機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究『九～十九世紀文書資料の多元的複眼的比較研究』二〇一一年度年次報告書（編集　渡辺浩一）、二〇一二年三月）

荒井経・染谷香理・平論一郎・中村裕美子・杉本史子「国絵図復元—巨大絵図制作の技術」（『東京藝術大学美術学部紀要』五〇号、二〇一二年一二月）

「鳥瞰風景のなかの将軍」（箱石大編『戊辰戦争の史料学』勉誠出版、二〇一三年三月）→3

「江戸城と江戸」（東京大学史料編纂所編『日本史の森をゆく　史料が語るとっておきの42話』中公新書、二〇一四年一二月）

「近世日本裁判再考」（臼井佐知子、H・ジャン・エルキン、岡崎敦、金炫栄、渡辺浩一編『契約と紛争の比較史料学—中近世における社会秩序と文書』吉川弘文館、二〇一四年一二月）

「新たな海洋把握と「日本」の創出—開成所と幕末維新」（『日本史研究』六三四号、二〇一五年六月）→3

「地図・絵図の出版と政治文化の変容」（横田冬彦編『シリーズ〈本の文化史〉4　出版と流通』平凡社、二〇一六年一〇月）→2

"Shifting Perspectives on the Shogunate's Last Years : Gountei Sadahide's Bird's-Eye View Landscape Prints." *Monumenta Nipponica* 72-1（2017）: 1-30. →3

「近代国家形成過程再考—新しい海洋の登場とジオ・ボディ」（ダニエル・V・ボツマン、塚田孝、吉田伸之編『「明治一五〇年」で考える—近代移行期の社会と空間』山川出版社、二〇一八年一一月）→3

「政治社会の動きを描くパノラマ的広域鳥瞰図」（『近世文学史研究　第三巻　十九世紀の文学　百年の意味と達成を問う』ロバート・キャンベル監修、ぺりかん社、二〇一九年一一月）

「海洋空間と情報の幕末史—海図と船艦の一九世紀」（『都市史研究』第六号、二〇一九年一〇月）→3

「「海洋知の再編と日本社会」ノート—史料と研究視角」（『東京大学史料編纂所研究紀要』三〇号、二〇二〇年三月）→3

"Political Cartography in the Tokugawa Period." In *the Oxford Research Encyclopedia of Asian History*. David Ludden ed. New York: Oxford University Press.（https://asianhistory.oxfordre.com/　二〇二〇年八月からオンライン公開）→3

「絵図の史学」（『ユリイカ』七五九号、二〇二〇年六月）

「国絵図研究のあゆみを俯瞰する」（小野寺淳・平井松午編『国絵図読解事典』創文社、二〇二一年二月）→3

「近世裁判史研究の可能性」（『法制史研究』七〇号、二〇二一年三月）

"Analysis of history with a focus on space." *Impact, Volume 2021*, Number 7, September 2021: 26-29.（https://www.ingentaconnect.com/contentone/sil/impact/2021/00002021/00000007/art00010 から、二〇二一年九月よりオンライン公開）

「「伊能忠敬とその時代」の解明のために—羽太正養『休明光記』を素材に—」（平井松午編『伊能忠敬の地図作製—伊能図・シーボルト日本図を検証する』古今書院、二〇二二年二月）

〔小論〕

「歴史と空間」（『絵図の世界』さいたま市立博物館、二〇一二年一〇月）

「国絵図」（『週刊朝日百科　三一　日本の歴史　江戸時代4』二〇一四年一月）

「近世から近代へ—海図が語る歴史」（『東京大学史料編纂所研究紀要』二四号、二〇一四年三月）

「演じられる近世社会—歌舞伎作者並木正三と「三千世界商往来」」（『日本歴史』八〇〇号、二〇一五年一月）

「武士と江戸」（都市史学会編『日本都市史・建築史事典』丸善出版、二〇一

八年一一月）
「地図」（洋学史学会監修、青木歳幸、海原亮、沓澤宣賢、佐藤賢一、イザベル・田中・ファンダーレン、松方冬子編『洋学史研究事典』思文閣出版、二〇二一年九月）

〔書評〕

「書評　藤田覚編『幕藩制国家の政治構造』」（『法制史研究』六七号、二〇一八年三月）
「書評　幕藩研究会編『論集　近世国家と幕府・藩』」（『法制史研究』七〇号、二〇二一年三月）

〔共同研究の成果報告書等〕

『東京大学史料編纂所研究成果報告2011-2　「地図史料学の構築」の新展開　第一部』（二〇〇九～二〇一一年度・科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果）
『東京大学史料編纂所研究成果報告2011-2　「地図史料学の構築」の新展開　第二部』（二〇〇九～二〇一一年度・科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果）
『東京大学史料編纂所研究成果報告2014-3　近代移行期歴史地理把握のタイムカプセル「赤門書庫旧蔵地図」の研究』（科学研究費補助金基盤研究(C)「近代化模索期の「国史」編纂と地図作成―赤門書庫旧蔵地図の研究」（二〇一二～二〇一四年度）・東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター「赤門書庫旧蔵地図」プロジェクト）
『東京大学史料編纂所研究成果報告2019-2　変動期の政治社会と海洋知』（二〇一七～二〇一九年度・科学研究費補助金基盤研究(C)「近代国家模索の歴史的前提―十八～十九世紀、「極東」のなかの「日本」」・東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センター海洋教育基盤研究プロジェクト（海洋学）「海洋知の再編と日本社会」プロジェクト）
『東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センター海洋教育基盤研究プロジェクト（海洋学）「『海洋知の再編と日本社会』の新展開」ニューズレター』一～六号（http://edozu.blogspot.com/　オンライン公開中、二〇二〇年度）
『東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センター海洋教育基盤研究プロジェクト（海洋学）「海洋知と領域支配」ニューズレター』一～四号（http://edozu.blogspot.com/　オンライン公開中、二〇二一年度）

〔学会報告・企画〕

「江戸幕府評定所裁許再考」（法制史学会東京部会　第二三八回例会、二〇一一年一一月、法政大学ボアソナード記念現代法研究所会議室）
「近世日本における支配の特質―武家政権と政治空間」（科学研究費補助金基盤研究(S)「ユーラシアの近代と新しい世界史叙述」（研究代表者・東京大学教授羽田正）研究会、二〇一一年一一月、東京大学東洋文化研究所）
「近世日本裁判再考―社会と裁判」（人間文化研究機構連携研究「「人間文化資源」の総合的研究」研究班「九～十九世紀文書資料の多元的複眼的比較研究」第二回国際研究会「前近代社会における秩序維持の「道具」：紛争処理の文書」二〇一一年一二月、トルコ・アンカラ大学）
「近世裁許状の特質」（歴史と史料の会、東京大学史料編纂所、二〇一三年三月）
「政治的危機としての桜田門外の変」（歴史と史料の会、東京大学史料編纂所、二〇一三年一〇月）
「地図史料学とデジタル情報の可能性」（地図史料学のデジタル化展望研究会、東京大学法文二号館、二〇一三年一〇月）
「文字と図の史料論・試論―日本近世の場合」（科学研究費補助金基盤研究(S)「ユーラシアの近代と新しい世界史叙述」（研究代表者・東京大学教授羽田正）研究会「史料を行為と作用から見る」（第四回「翻訳」研究会）二〇一三年一〇月、東京大学東洋文化研究所大会議室）
「「前近代の権力を問う」問題提起」（基盤研究(S)「ユーラシアの近代と新しい世界史叙述」（研究代表者・東京大学教授羽田正）研究会、二〇一四年一月、東京大学東洋文化研究所大会議室）
「幕末の官板「日本」図出版と政治文化の変容」（国絵図研究会、宮崎県日南市国際交流センター小村記念館、二〇一四年三月）
「幕末の開成所と官板日本図刊行―近世的政治文化の変容」（歴史と史料の会、東京大学史料編纂所、二〇一四年六月）

「明治初年の開成所会議・徳川家公議所について」（歴史と史料の会、東京大学史料編纂所、二〇一四年八月）
「幕末の官板日本図の出版と政治文化の変容」（日本史研究会九月例会「空間表現の知と政治―十九世紀の海から」、京都、機関紙会館、二〇一四年九月）
「近世政治社会の動態的分析のために」（歴史と史料の会、東京大学史料編纂所、二〇一五年一二月）
「慶応四年の開成所会議と「徳川家公議体制」」（明治維新史学会例会報告、明治大学、二〇一五年一二月）
「江戸城を論じるということ」（東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター「江戸城図・江戸図・交通図および関連史料の研究」プロジェクト、二〇一五年度総括会議、東京大学史料編纂所、二〇一六年三月）
「近世の政体と江戸城」（歴史と史料の会、東京大学史料編纂所、二〇一六年五月）
「近世の政治体制と江戸城―「公儀の裁き」を問い直す前提として」（東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター「江戸城図・江戸図・交通図および関連史料の研究」プロジェクト研究会　東京大学福武ホール、二〇一六年五月）
“Modern Nautical Charts and Geo-Bodies”（paper presented at the Third Global History Seminar Workshop: Sources in Global History, Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo, January 28, 2017）.
「問題提起：歴史のなかの領土・領海・島嶼そして海洋」東京大学海洋アライアンス・イニシャチブ「小島嶼国研究会」主催シンポジウム「領土・領海と島嶼」、東京大学理学部小柴ホール、二〇一七年二月（企画・モデレータ・司会として参加）
“Sea Changes and the Geo-Body : the Creation of 19th Century ‘Japan’.”（「海洋の変容とジオ・ボディ―十九世紀「日本」の創出」）（paper presented at the The Meiji Restoration and its Afterlives: Social Change and the Politics of Commemoration : Critical Reflections on the 150th Anniversary of Japan’s Meiji Restoration, New Haven, Edward P. Evans Hall, Yale University. Sep. 15-17. 2017）.
「近世日本の政治体制と裁判の特質」（歴史と史料の会、東京大学福武ホール、二〇一七年一〇月）
「近世日本政治社会における裁判の意味」（第一〇回奎章閣国際シンポジウム「東アジアの訴訟と法観念」（Litigation in East Asia and the Concept to Law）ソウル大学、二〇一七年一一月）
「裁判の政治史―複合的国制と「政治空間としての江戸城」から問い直す―」（国際歴史文化研究会第六回合宿、国民宿舎奥浜名湖、二〇一八年三月）
「政治社会の動きを描くパノラマ的広域鳥瞰図」（第二三回国際浮世絵学会秋季大会「名所絵・地図・地誌」國學院大學渋谷キャンパス百周年記念講堂、二〇一八年一二月）
「海洋空間と情報の幕末史」（二〇一八年度都市史学会大会「海峡と都市」、西日本工業大学小倉キャンパス、二〇一八年一二月）
「海洋知の再編と日本社会―十九世紀「新しい海洋」のなかで―」（東京大学海洋教育センター先端的海洋教育カリキュラム検討会、東京大学理学部一号館、二〇一九年七月）
「惣構論ノート―政治史と都市史の統合」（国際歴史文化研究会・「城・都市と危機」研究会合同合宿、箱根湯本ホテル明日香、二〇一九年九月、科学研究費補助金・基盤研究Ⓒ「近代国家模索の歴史的前提」（17K03094）、東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センター・海洋教育基盤研究プロジェクト（海洋学）「海洋知の再編と日本社会」共催）
「十九世紀大老文書の史料集刊行と電子索引公開―大日本維新史料シリーズ『井伊家史料』の人名電子索引公開について―」（東京大学史料編纂所国際研究集会「維新史料研究と国際発信」東京大学伊藤国際学術研究センター、二〇一九年一二月）
「『近世政治空間論』と今後の課題」（シンポジウム「日本近世の法と経済――杉本史子著『近世政治空間論』を素材として――」法制史学会東京部会第二七九回例会、東京大学東洋文化研究所、二〇二〇年二月）

「近代的国家領域の模索—海域と「日本」」（世界遺産研究会、Zoom 開催、二〇二一年一月）
“Analysis of History with a Focus on Space”（First International Conference on East Asian Cultures, Research Centre for East Asian Cultures, St Anne's College, University of Oxford, 20-22 August, 2021, Held Online）.

〔シンポジウム等企画〕

東京大学海洋アライアンス・イニシャチブ「小島嶼国研究会」主催シンポジウム「領土・領海と島嶼」、東京大学理学部小柴ホール、二〇一七年二月（企画・モデレータ・司会として参加）
東京大学海洋アライアンス、沖ノ鳥島・小島嶼国プログラムシンポジウム『海域と島々—物語と歴史—』（Zoom ウェビナーにて開催、二〇二二年三月）（企画・司会を担当）

〔講演等〕

「社会のなかの領主裁判—評定所と江戸城空間」（名古屋大学近世史研究会、名古屋大学文学部本館、二〇一一年七月）
「国絵図と近世日本社会」（Symposium on the Pre-Modern Japanese Collections at Yale University, Beinecke Rare Book & Manuscript Library, October, 2011）
「時事と鳥瞰図　その背景にあるもの」（Mapping Japanese History : Space, Power, Representation, Henry R. Luce Hall,Yale University, September 17, 2012）
記念講演会「絵図の世界にようこそ—江戸時代の空間表現」（市立市川歴史博物館　平成二三年度　歴史博物館企画展示「絵図から見たいちかわ」、二〇一二年三月）
第四〇回企画展講演会「近世社会と絵図作成—その特質と変容」（川越市立博物館、二〇一四年四月）
「歴史と空間」（神戸大学史学研究会、神戸大学文学部、二〇一四年七月）
「官板実測日本地図—十九世紀パリ万国博覧会に出品された『日本』」（伊能図講演会「伊能忠敬と沿海地図・官板実測日本地図」、徳島大学総合科学部常三島けやきホール、二〇一六年三月）
「デジタル画像と歴史・文化の継承—情報としての国絵図」（第四回柏図書館クローズド・レクチャー、東京大学附属図書館、二〇一六年七月）
「パリ万博に展示された「日本」—海洋空間の変容と十九世紀の人々—」（海事史学会総会、東京大学教養学部駒場ファカルティハウス、二〇一六年六月）
「近世出版文化の中の絵図・地図—海洋把握の変容と「日本」」（東洋文庫東洋学講座「江戸の書物」二〇一六年一二月）※『東洋学報』第九八巻第四号（二〇一七年三月）に、要旨掲載。
「『モノの身分』と色彩で読み解く国絵図」（文京アカデミア、東京大学福武ホール他、二〇一七年七月）
「海から日本史を見直す—近代的国土観の模索」（文京アカデミア、文京シビックセンター、二〇一七年一〇月）
「世界と空間を描く—江戸時代、表現する人々—」（東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター設立二十周年記念公開講演会、東京大学農学部弥生講堂一条ホール、二〇一八年一月）
「世界を描く—古地図にみる江戸の人々の見方・考え方」（東洋文庫ミュージアム講演会、東洋文庫、二〇一八年一一月）

二・二　教授任用以前の主要な業績

〔著書〕

『領域支配の展開と近世』（山川出版社、一九九九年七月）

〔編著〕

黒田日出男、メアリ・エリザベス・ベリ、杉本史子編『地図と絵図の政治文化史』（東京大学出版会、二〇〇一年八月）
鵜飼政志・蔵持重裕・杉本史子・宮瀧交二・若尾政希編『歴史をよむ』（東京大学出版会、二〇〇四年一一月）

〔論文〕

「岩国享保一揆をめぐって」（『山口県地方史研究』四八号、一九八二年一一月）

「文化期児島湾争論とその背景」（藤井駿先生喜寿記念会編『岡山の歴史と文化』福武書店、一九八三年一〇月）→1
「近世中期における大名領知権の一側面—山野河海開発・領有をめぐって」（『日本史研究』二六二号、一九八四年六月）→1
「国絵図作成事業と近世国家」（『歴史学研究』五八六号、一九八八年一〇月）→1
「『天皇』号をめぐって」（『歴史評論』四五七号、一九八八年五月）
「国絵図作成事業と伊勢神宮領」（『日本歴史』四九八号、一九八九年一一月）→3
「島津家文書国絵図調査報告」（『東京大学史料編纂所報』二四号、一九八九年三月、黒田日出男氏と連名）
「天保国高・国絵図改訂事業の基礎過程」（『人民の歴史学』一〇六号、一九九〇年一二月）→1
「国絵図研究の位置と課題」（『日本歴史』五二九号、一九九二年六月）→1
「絵図に表された近世」（『神戸大学史学年報』七号、一九九二年六月）
『絵にみる図でよむ千葉市図誌　上下巻』（千葉市、一九九三年三月（共同執筆））
「国絵図」（『岩波講座　日本通史』十二巻、一九九四年三月）→3
「地域と近世国家—「百姓公事」の位置」（『新しい近世史』二、新人物往来社、一九九六年六月）→1
「地域の記録　日本近世の場合」（濱下武志・辛島昇編『地域の世界史1』山川出版社、一九九七年七月）→1
「絵師—渡辺崋山、『画工』と『武士』のあいだ—」（横田冬彦編『シリーズ近世の身分的周縁二　芸能・文化の世界』吉川弘文館、二〇〇〇年七月）→2
「『裁許』と近世社会—口頭・文字・絵図」（黒田日出男、メアリ・エリザベス・ベリ、杉本史子編『地図と絵図の政治文化史』東京大学出版会、二〇〇一年八月）→2
「十八世紀、秀吉への謀反を演じるということ—並木正三『三千世界商往来』と近世社会」（藤田達生編『近世成立期の大規模戦争　戦場論　下』岩田書院、二〇〇六年四月）→3
「時事と鳥瞰図—幕末、新たな空間の誕生と五雲亭貞秀—」（『千葉県史研究』一六号、二〇〇八年三月）→3
「房総の空間を描く」（『千葉県の歴史　通史編　近世2』二〇〇八年三月）→3
「近世地図論序説—身分秩序と主体・行為・モノ」（『歴史学研究』八四一号、二〇〇八年六月）→3
「史料学の試み—『モノとしての史料』を問い直す」（齋藤晃編『テクストと人文学　知の土台を解剖する』人文書院、二〇〇九年一月）→3
「異国・異域情報と日常世界」（荒井泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係6　近世的世界の成熟』吉川弘文館、二〇一〇年一一月）→3
「山口県文書館所蔵絵図に使用された色料についての科学的調査」（『東京大学史料編纂所研究紀要』二一号、二〇一一年三月（早川泰弘氏・吉田直人氏・村岡ゆかり氏・小野寺淳氏と連名論文のうち、「はじめに」執筆））
「山口県文書館所蔵絵図群の伝来と特質」（『東京大学史料編纂所研究紀要』二一号、二〇一一年三月（河村克典氏・山田稔氏・礒永和貴氏と連名論文のうち、「はじめに」「残された課題」執筆））

〈小論〉

「絵図が作られた目的は何か—国絵図、村絵図にみる空間把握」（吉村武彦他編『日本の歴史を解く一〇〇話』文英堂、一九九四年九月）
「歴史編纂と地理編纂—『内務省引継地図』『内務省地理局文書』をめぐる覚書」（研究代表者横山伊徳、科学研究費補助金・基盤研究(C)『内務省地理局における地図蓄積＝管理構造の復原的研究』報告書、二〇〇四年三月）
「裁許証文—村からみた、近世の領主裁判」（歴史科学協議会　鵜飼政志・蔵持重裕・杉本史子・宮瀧交二・若尾政希編『歴史をよむ』東京大学出版会、二〇〇四年一一月）
「大隅国・薩摩国　島津家と国絵図」（国絵図研究会編『国絵図の世界』柏書房、二〇〇五年七月）
「絵図の時代（一）～（九）」（『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』三一～四五号、二〇〇五年一〇月～二〇〇九年四月）

（1）「『書物』としての絵図・『草紙』としての絵図―国図と出版統制」
（2）「地図と絵画の間―一覧図の世界」
（3）「〝上品な日常知識〟のなかの一覧図」
（4）「色をかたちづくるもの」→3
（5）「自然は何色か―色彩材料から見た絵図」→3
（6）「ふたつの緑色―同時代人の眼」→3
（7）「輝きと普遍―秩序表現としての彩色」→3
（8）「赤い色の調達―近世の朱座」
（9）「境界上の地名は誰のものか―競合する地名」→3

杉本史子・梅田千尋「国立公文書館所蔵下総国元禄・天保国絵図調査報告①」（『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』四六号、二〇〇九年七月）

「歴史の息遣い　江川文庫調査から〈9〉　代官所支配を支えた「紙」」（『静岡新聞』夕刊、二〇一〇年三月一三日）

〔学会報告〕

「国絵図作成事業と近世国家」（一九八八年度歴史学研究会大会報告）
「幕末維新政治史の諸問題」（一九八九年度近世史サマーセミナー）
「天保国高・国絵図改定事業の基礎過程」（一九九〇年度東京歴史科学研究会大会報告）
「日本近世における政治文化と地図」（歴史学研究会総合部会例会、一九九四年一〇月）
「絵図へのアプローチ」（科学研究費補助金・国際共同研究「日本中近世における社会情報と政治文化」第一回全体会、京都大学、一九九五年八月）
「地域と近世国家―『百姓公事』の位置」（岡山藩研究会例会、一九九六年）
「日本における地図作成の特質」（科学研究費補助金・国際共同研究「日本中近世における社会情報と政治文化」第二回全体会、カリフォルニア大学、一九九六年一〇月）
「地域の記録―近世における地誌・絵図を中心として」（歴史学研究会近世史部会例会、一九九八年）
「日本における『裁許』―裁判書類と絵図」（東京大学東洋文化研究所「アジア土地関係資料の比較研究」班報告、二〇〇〇年一〇月）
「歌舞伎『三千世界商往来』の世界像」（研究フォーラム「物・人・情報からさぐるアジア交流史」、天理大学、二〇〇二年一月）
「近世日本における巨大絵図―国絵図」（京都大学二一世紀ＣＯＥプログラム「十五・十六・十七世紀の絵図・地図と世界観」研究会、京都大学、二〇〇三年三月）
「八瀬・比叡山山論経過と絵図にみる境界」（小野寺淳氏と共同報告、東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター研究集会、二〇〇四年二月）
「幕末期、出版文化と一覧図」（書物と社会変容研究会、一橋大学、二〇〇五年六月）
「二〇〇五年度長門市・ボストン調査報告のなかから―鯨過去帳と鯨絵巻―」（科学研究費補助金・基盤研究(A)「グローバリゼーションと反グローバリゼーション―捕鯨を手がかりとして」報告、二〇〇六年六月）
「政治文化と口頭・書写・出版―高木昭作『江戸幕府の制度と伝達文書』を読んで」（国立民族学博物館共同研究「テクスト学の構築」、二〇〇六年一一月）
「絵図研究と科学的調査」（東京文化財研究所主催研究会「絵図研究と科学的調査」、二〇〇七年二月）
「十九世紀における鳥瞰図と『時事』」（国立民族学博物館共同研究「テクスト学の構築」、二〇〇七年三月）
「ハーバード大学サックラー美術館所蔵鯨絵巻『鯨鯢記目録』の紹介」（立教大学日本学研究所・鯨科研主催公開シンポジウム「捕鯨を通して見る世界Ⅲ―人類史としての捕鯨史の構築に向けて―」、二〇〇七年七月）
「構造体としての地図―国絵図」（科学研究費補助金・基盤研究(A)「地図史料学の構築―前近代地図データ集積・公開のために―」公開研究集会「歴史のなかの地図Ⅱ―地図、知の交差点」、東京大学山上会館、二〇〇七年七月）
「「近世的表現メディア」と異国・異域情報」（女性研究会、東京大学史料編纂所、二〇〇八年七月）
「問題提起」（科学研究費補助金・基盤研究(A)「地図史料学の構築―前近代地

図データ集積・公開のために―」・シンポジウム「歴史のなかの地図Ⅴ 江戸と江戸城―市民社会と政治文化」、東京大学山上会館、二〇一〇年九月）
「近世日本の情報世界とメディア」（科学研究費補助金・基盤研究(S)「ユーラシアの近代と新しい世界史叙述」（研究代表者：東京大学羽田正）研究会、東京大学東洋文化研究所、二〇一一年六月）

〔シンポジウム等企画〕

公開研究集会・シンポジウム「歴史のなかの地図」シリーズ
「Ⅰ　測量」二〇〇六年七月、
「Ⅱ　地図、知の交差点」二〇〇七年七月、
「Ⅲ　近代国家形成と地図作製―比較史的観点から」二〇〇八年七月、
「Ⅳ　政治と文化」二〇〇九年七月、
「Ⅴ　江戸と江戸城―市民社会と政治文化」二〇一〇年九月、
（二〇〇八年度まで、科学研究費補助金・基盤研究(A)「地図史料学の構築―前近代地図データ集積・公開のために―」、二〇〇九年度以降は、同「『地図史料学の構築』の新展開―科学的調査・復元研究・データベース―」主催、いずれも東京大学）

〔講演等〕

「近世巨大絵図―国絵図」（東京大学創立一二〇周年記念「知の解放」、一九九七年度）
「近世絵図史料論」（東京大学史料編纂所史料学セミナー、一九九八年一二月）
「近世における裁判の特質について」（山口大学史学会、一九九八年一二月）
「絵図はなぜ作成されたか」（歴史文化講演会、柳川市、一九九九年一一月）
「『井伊家史料』をよむ―江戸城普請の政治学」（東京大学史料編纂所史料学セミナー、二〇〇三年一一月）
「近世の境界争論と裁判」（岡山大学、二〇〇三年一〇月）
「十八世紀の八瀬の境界決定と政治情勢」（「八瀬・大原の歴史とあゆみ」、八瀬小学校、二〇〇五年三月）
「国図と出版文化―身分社会と文化生産」（茨城大学社会連携支援事業・日本地理学会二〇〇五年度秋期学術大会、茨城大学、二〇〇五年九月）
「絵図の時代」（富士市立博物館・第四五回企画展「村絵図を歩く」特別講演会、二〇〇七年二月）
「近世の空間表現と岡山藩」（岡山県立博物館講座「岡山の歴史と文化」二〇〇八年一〇月）
「「桜田門外の変」とそれを取り巻く世界」（東京大学史料編纂所アフタヌーン・セミナー二〇〇八「政治の舞台 桜田門外から江戸城を巡る」二〇〇八年一〇月）
「歴史のなかの文化産業―幕末、篤姫画像を売る時代」（杏林大学外国語学部・応用コミュニケーション学科「文化産業論」講演、二〇〇八年一二月）

三　編纂・研究事業実績一覧

三・一　教授任用後の編纂・研究事業歴

〔編纂〕

『大日本維新史料　類纂之部　井伊家史料二十七』　二〇一二年
『大日本維新史料　類纂之部　井伊家史料二十八』　二〇一四年
『大日本維新史料　類纂之部　井伊家史料二十九』　二〇一六年
『大日本維新史料　類纂之部　井伊家史料三十　補遺』　二〇一九年

〔科学研究費補助金による研究〕

代表者

科学研究費補助金・基盤研究(C)「近代国家模索の歴史的前提―十八～十九世紀、「極東」のなかの「日本」」（課題番号 17K03094、二〇一七～二〇一九年度）
科学研究費補助金・基盤研究(B)「日本近世史料学の再構築―基幹史料集の多角的利用環境形成と社会連携を通じて」（課題番号 22H00692、二〇二二～二〇二四年度）

分担者等　※分担者については表記を省略した。

日本学術振興会研究拠点形成事業「新しい世界史／グローバル・ヒストリー共同研究拠点の構築」（研究代表者：東京大学羽田正、二〇一四～二〇一八年度）のシニアメンバー

科学研究費補助金・基盤研究(A)「伊能図の成立過程に関する学際的研究—忠敬没後二〇〇年目の地図学史的検証—」(課題番号18H03603、研究代表者：徳島大学平井松午、二〇一八～二〇二一年度)
科学研究費補助金・基盤研究(B)「南西諸島における海上交通の復元的研究—「帆船の時代」の「歴史航海図」—」(課題番号18H00698、研究代表者：東京大学黒嶋敏、二〇一八～二〇二一年度)
科学研究費補助金・基盤研究(C)「中近世日本の法的世界を問い直す—裁判史・政治史・経済史の対話—」(課題番号22K01120、研究代表者：一橋大学松園潤一朗、二〇二二～二〇二四年度)

〔プロジェクト研究〕

東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター「赤門書庫旧蔵地図プロジェクト」(二〇一〇～二〇一四年度)(代表　※開始年度は教授任用以前)
東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター「江戸城図・江戸図・交通図および関連史料の研究」プロジェクト(二〇一五～一〇一八年度)(代表)
二〇一九年度東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センター・日本財団海洋教育基盤研究プロジェクト(海洋学)「海洋知の再編と日本社会」(代表)
二〇二〇年度東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センター・日本財団海洋教育基盤研究プロジェクト(海洋学)「『海洋知の再編と日本社会』の新展開」(代表)
二〇二一年度東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センター・日本財団海洋教育基盤研究プロジェクト(海洋学)「海洋知と領域支配」(代表)

〔共同利用・共同研究拠点〕

東京大学史料編纂所 共同利用・共同研究拠点・二〇一八年度一般共同研究「江戸城本丸御殿平面図・間取図の収集と研究資源化に関する研究」(小粥祐子代表)の所内共同研究者

三・二　教授任用以前の編纂・研究事業歴

〔編纂〕

『大日本維新史料　類纂之部　井伊家史料十五』　一九八七年
『大日本維新史料　類纂之部　井伊家史料十六』　一九八八年
『大日本維新史料　類纂之部　井伊家史料十七』　一九九一年
『大日本維新史料　類纂之部　井伊家史料十八』　一九九三年
『大日本維新史料　類纂之部　井伊家史料十九』　一九九五年
『大日本維新史料　類纂之部　井伊家史料二十』　一九九七年
『大日本維新史料　類纂之部　井伊家史料二十一』　一九九九年
『大日本維新史料　類纂之部　井伊家史料二十二』　二〇〇一年
『大日本維新史料　類纂之部　井伊家史料二十三』　二〇〇三年
『大日本維新史料　類纂之部　井伊家史料二十四』　二〇〇五年
『大日本維新史料　類纂之部　井伊家史料二十五』　二〇〇七年
『大日本維新史料　類纂之部　井伊家史料二十六』　二〇一〇年

〔科学研究費補助金による研究〕

代表者

科学研究費補助金・奨励研究(A)「日本近世における山野河海をめぐる裁判権掌握についての研究—絵図史料、および文字史料の非文字的情報に注目して—」(一九九五年度)
福武学術文化振興財団「日本における論所裁判の特質」(一九九八年度)
公益財団法人・国際文化交流事業財団・人物交流派遣事業(連合王国、二〇〇五年度)
科学研究費補助金・基盤研究(A)「地図史料学の構築—前近代地図データ集積・公開のために—」(二〇〇六～二〇〇八年度、課題番号18202015)
科学研究費補助金・基盤研究(A)「『地図史料学の構築』の新展開—科学的調査・復元研究・データベース—」(二〇〇九～二〇一一年度、課題番号21242018)

分担者等　※分担者については表記を省略した。

科学研究費補助金一般研究(B)「近世幕府文書の古文書学的研究」(研究代表者：東京大学加藤秀幸、一九九〇～一九九一年度)
科学研究費補助金・国際学術研究共同研究「日本中近世における社会情報と政治文化についての研究—絵図史料を中心として—」(研究代表者：東京大学黒田日出男、一九九五～一九九七年度)

科学研究費補助金・基盤研究(A)「八―十七世紀の東アジア地域における人・物・情報の交流―海域と港市の形成、民族・地域間の相互認識を中心に―」(研究代表者：東京大学村井章介、二〇〇〇～二〇〇三年度)
科学研究費補助金・基盤研究(C)「内務省地理局における地図蓄積＝管理構造の復原的研究」(研究代表者：東京大学横山伊徳、二〇〇二～二〇〇三年度)
科学研究費補助金・基盤研究(A)「歴史情報資源活用システムと国際的アーカイブズネットワークの基盤構築に向けての研究」(研究代表者：学習院大学高埜利彦、二〇〇三～二〇〇六年度)
科学研究費補助金・基盤研究(A)「大規模武家文書群による中・近世史料学の統合的研究―萩藩家老益田家文書を素材に―」(研究代表者：東京大学久留島典子、二〇〇三～二〇〇六年度)
科学研究費補助金・基盤研究(A)「近世成立期の大規模戦争と幕藩体制―占領・国分・仕置の視点から―」(研究代表者：三重大学藤田達生、二〇〇一～二〇〇四年度)
科学研究費補助金・基盤研究(C)「八瀬童子の空間認識と歴史意識―日常・非日常的空間への歴史地理学的アプローチ―」(研究代表者：茨城大学小野寺淳、二〇〇三～二〇〇四年度)
科学研究費補助金・基盤研究(A)「グローバリゼーションと反グローバリゼーションの相克―捕鯨を手がかりとして―」(研究代表者：立教大学荒野泰典、二〇〇四～二〇〇七年度)
科学研究費補助金・基盤研究(A)「日本における書物・出版と社会変容」(研究代表者：一橋大学若尾政希、二〇〇五～二〇〇七年度)
科学研究費補助金・基盤研究(A)「江戸幕府・朝廷・諸藩の編年史・編纂史料集の史料学的研究」(研究代表者：東京大学山本博文、二〇〇六～二〇〇九年度、研究分担者・連携研究者)
科学研究費補助金・基盤研究(B)「近世後期における地域ネットワークの形成と展開　日田広瀬家を中心に」(研究代表者：東京大学横山伊徳、二〇〇六～二〇〇八年度)
科学研究費補助金・基盤研究(A)「「書物・出版と社会変容」研究の総合化に向けて」(研究代表者：一橋大学若尾政希、二〇〇八～二〇一〇年度)
科学研究費補助金・基盤研究(B)「江川代官所文書の総合的研究」(研究代表者：静岡大学湯之上隆、二〇〇八～二〇一一年度)
科学研究費補助金・基盤研究(A)「「書物・出版と社会変容」研究の深化と一般化のために」(研究代表者：一橋大学若尾政希、二〇一一～二〇一五年度)
科学研究費補助金・基盤研究(S)「ユーラシアの近代と新しい世界史叙述」(研究代表者：東京大学羽田正、二〇〇九～二〇一三年度、研究協力者)

四　自己評価報告書

四・一　研究活動の自己評価

これまでの研究の基底となってきたのは、「身分制社会における公とは何か」という問いである。また、文字史料、絵図史料、それぞれから得られた視点を、相互にフィードバックさせていく手法を取ってきたことが、研究上の特質を形成してきた。

「身分制社会における公とは何か」という問題関心から一貫して分析対象としてきたのが、第一に、江戸幕府評定所であり、第二に、絵図・地図の問題である。

二〇一八年に出版した『近世政治空間論』をめぐって、法制史学会東京部会において開催されたシンポジウム「日本近世の法と経済―杉本史子著『近世政治空間論』を素材として」(二〇一九年)における報告をまとめた「近世裁判史研究の可能性」(二〇二〇年)では、裁きが身分統制と不可分に結びつき、司法が政治や支配から独立していない歴史段階では、政治組織・権力編成・身分秩序の問題を視野に入れ、裁きの実態や手続きを動態的に把握する視点が必要であることを指摘した。

近世日本の政治体制については、しばしば前代に比較してのその集権性が注目されてきた。しかし、紛争とその解決の問題の分析には、複合的で複雑な権力編成と、諸領主（いわゆる幕府・藩のみならず、天皇・朝廷、寺社を含む）のそれぞれの刑罰権・裁判権が必ずしも整序されないかたちで併存する状況（以下「複合的構成」と呼ぶ）の問題が常に念頭に置かれなければな

らない。

評定所は、幕政の中軸となる老中制度の形成と並行して、老中会議から枝分かれするかたちで設定され、「公儀」としての重要な機能のひとつであった、藩などの個別の支配を超えた複数の支配に亘る紛争の裁きを担った。評定所の確立期（十七世紀）には、国持大名の訴訟権をどう扱うかが問題となっていた。そして、「山川田畑の出入」・境論については大名の提訴は認めず（領主「直公事」の禁止）、村に出訴権を認め（百姓公事の原則）、一方狼藉については大名から老中に伺うという判断が示された。近世村の法的地位の問題と、これまで看過されてきた大名訴訟権の問題を、近世の権力編成・政治構造から捉え直す必要がある。

またこれまでの裁判史研究では、近世の裁許について判決一般として検討されてきた。これに対して、評定所は、天明期（一七八一～一七八八年）をひとつの頂点に、複数の判決方式を使い分ける精緻な裁判手順を構築していたことを明らかにした。複合的構成のなかで、評定所は、「公儀」の裁判による決定というものを、どのような裁許内容を決定するかという点のみならず、どのような裁許方式・裁許書類を用いてその決定を示すかによって、個々の裁きを意味づけていた。しかし、この裁きの体系は、十八世紀末ごろを境に実質的に自壊していった。近世幕府判決手順の中核に請証文を置くこれまでの理解は、この自壊後の徳川政権最後の半世紀の状況を、近世の裁きの本来のものと誤認したものだった。評定所の裁きのあり方は不動ではなく、また、一領主としての性格を残した幕府は、「公正な第三者」になり切れていなかった。

評定所については、『近世政治空間論』において、城領域と都市領域の両方が重なりあう政治空間（江戸城のなかの境界領域）に立地し、城の中核部分と連携しながら、成熟した都市機能に依拠して業務を行うという、新しい像を打ち出した。最幕末には、開成所メンバーの構想により設置された二院制議会の下院（公議所）が評定所に設置された。評定所は、公儀から公議への変化を、まさに象徴的に表す場でもあった。

第二の分析対象である絵図・地図が、「公」の問題とどうかかわるかについては、いささか説明が必要であろう。狭い範囲の文化や価値観・考え方、そして日常の空間感覚を共有している人々の間では、社会や世界の図化は必ずしも必要ではない。口頭や文章で十分コミュニケーションすることが可能なのである。わたくしは、絵図・地図とは、限定的な共同体を超えた「他者」に対しての、支配や、合意や、主張に深くかかわった場面で作成される表現であると捉えている。絵図・地図は、常識を共有しない「他者」に語りかけ、働きかけるための重要なツールといえる。分析にあたっては、絵図・地図を作った人々が、彼らにとっての「他者」に対して、いかに自分の世界観や見方を語ろうとしようとしたか、そのことを常に念頭に置く必要がある。そして「公」というものもまた、「他者」へのまなざしの中に立ちあがってくると考えている。

国絵図は近世史研究では、伝統的国制の機能に注目する「国郡制論」の議論のなかで注目されてきた。中世以来の「日本」の代表的イメージのひとつは、国々の集合体としてのそれであり、「国」とは部分であると同時に「国土」に即時的につながる観念でもあった。この「国」を、当時可能な限り現地の地域共同体の認識に立脚して捉え直そうとした元禄国絵図作成事業についての私見（初出は「国絵図作成事業と近世国家」一九八八年）は、今日の国絵図研究の通説となっている。

次に、国絵図を古代国家の国図からの系譜で位置づけてきた従来の研究史に対して、この見方はむしろ近代になって成立したことを指摘し、さらに中国史における近年の地図史研究の成果を導入して、近世国絵図の成立には、ほぼ同時代のアジアにおける政治地図作製が影響を与えていることを明らかにした。そして、この視点から元禄国絵図事業を見直した時、この事業がこのようなアジアの潮流をくみながら、独自の空間把握の方式を獲得したとの理解を提示した（「Political Cartography in the Tokugawa Period」二〇二〇年、「国絵図研究のあゆみを俯瞰する」二〇二一年）。

この分野の研究では、助手時代に科研・国際学術研究共同研究「日本中近世における社会情報と政治文化」を組織したことから、その後も国際的・学際的な共同研究を組織する方向を取ってきたことが大きな特色となっている。三次にわたって多分野の専門家から成る共同研究を組織し、近世日本における空間表現の特質とその意味を究明し、その成果を国内外で刊行してき

た。日・独・米の研究者による共同研究の成果としての学術論集『地図と絵図の政治文化史』（二〇〇一年）、教授昇任とほぼ同時期に、歴史学・地理学・科学史・建築史・文化財科学、伝統的絵画作成に従事する画家および和紙表具技術者ら、多様な分野の研究者や専門技術者の参画を得て刊行した、絵図研究のはじめての総合入門書『絵図学入門』（二〇一一年）。またシカゴ大学から、日米欧の研究者たちが「地図にあらわされた歴史」について、歴史学、地理学、画家、文化財学、建築学、美術史家、文学、宗教学、情報学、科学史そして文化人類学、東アジア地域研究と、多岐の専門分野から、絵図の高精細画像を引用しながら語った『Cartographic Japan: A History in Maps』（二〇一六年、電子版も同時刊行）。『絵図学入門』は分野を超えたプラットフォームとして定着しており、また、そのなかで提唱した、近代的な空間分割に基づいた世界図・日本図・都市図などという分類ではない、「支配・領有のための絵図」など機能別の絵図分類は、その後の博物館展示にも影響を与えている。また、『Cartographic Japan』はすでに第二版を重ねている。

以上の成果は、国内外において、研究状況を牽引し、研究成果の社会還元に一定の成果をあげてきたと考えている。『地図と絵図の政治文化史』では、地図・絵図を歴史史料の主役のひとつとして位置づけることを企図し、絵図・地図を作成する行為の意味を問うたが、それからの二十年余りは、多くの共同研究や研究会を組織してこの問いを追求するというあゆみを進めてきたとも言えよう。『絵図の史学』（二〇二二年）では、これらの成果に基づき、歴史学の立場から絵図・地図を分析することの意味をあらためて論じた。

史料編纂所赤門書庫に眠っていた十九世紀海図群を整理・目録化（現在同図書室において閲覧可能）したことは、海洋からの視点から日本史を見直す契機となった。国家が測量から制作・販売まで統括した海図を「近代的海図」として捉え直すことで、とくに近代化過程における、海洋と人との関わりあいの変化（経緯度データをもった「近代的海図」と、蒸気船の使用）が国土観を変容させていったことを指摘した。幕府から条約締結国に向けた地図の作製を命じられた開成所（幕府の洋学教育研究機関。頻繁に名称が変更されているので、開成所と総称する）は、逆に、当時の世界情勢のなかで、官製の日本図を出版することの意味を幕閣に突き付けていった。彼らが作製した官製日本図（『官板実測日本地図』）は、国家主導の海陸についての近代測量に立脚し始めた同時代西欧のまなざしに対し、「国土」開示をめぐる薄氷を踏むような慎重な模索の表現であり、近世的国土観から近代的国土把握へと移行する過程をその描写に体現した稀有な地図であることを実証した。この成果は、『近世政治空間論』『絵図の史学』に収録するとともに、国際学会でも発表してきた（「Modern Nautical Charts and Geo-Bodies」（二〇一七年、東京大学）、「Sea Changes and the Geo-Body : the Creation of 19th Century 'Japan'」（二〇一七年、イエール大学）、「Analysis of History with a Focus on Space」（二〇二一年、オックスフォード大学、オンライン報告）。

そして、表現すること自体を目的として作成され消費される表現群と表現主体に注目してきた。これらの表現群は、戦後歴史学の分析の基軸に置かれてきた藩政史料・村方史料といった、支配―被支配のための表現群とは異なり、それが作りものであるからこそ、近世人の率直な世界のとらえかたが表明されていると考えている。そして近世の特徴としては、多くの人々がひとつの空間と体験を共有する歌舞伎や口舌文芸などの身体表現が、近世に出現した民間商業出版と結びつき、強い伝播力を獲得していたことに注目し、これらを「近世的公開メディア」と呼ぶことで、研究史上に可視化した。「近世的公開メディア」とは、ネットワークやサロンよりもさらに開かれたレベルで、「日本」の外の世界を日常世界のなかに注ぎこむ目に見えない水路であり、同時に、現実社会を相対化する多様なイメージを生む水源でもあった。この関心から具体的に取り上げたのは、歌舞伎作者並木正三にみられるような、完結した主体としての近代的個人とは異なる役者・作者・作品のありかたや彼らが作り上げた世界像であり、幕末の激動する政治社会を江戸市民が主体的に読み解くことが可能な風景として描き出した錦絵師五雲亭貞秀の広域鳥瞰錦絵群であり、藩重役であると同時に、民間出版文化や開かれた書画会に参加し自らを「公手」と誇る画工として、近世の身分秩序や公私観を相対化していった、蘭学者渡辺崋山であった（『近世政治空間論』『絵図の史学』）。

これらの分析から、それを統制する側にも関心を拡大し、近代的な情報統制とは異なる、身分制社会における統制の在り方を探ってきた。幕府の実施した出版検閲は、一方的な統制の場というよりも、「官」「民」の多彩なアクターのせめぎ合いの場として捉え直される必要がある。販売戦略として検閲システムを利用する出版者側の動きもあり、また検閲する側が、適正な販売価格かどうか誤った記述はないかを点検することも行われていた。一方幕府は、「書かれたもの」（印刷出版物のみならず手書きの物を含む）全般に対して、繰り返し町触による禁令を達した。これらの禁令は漠然とした禁止表現を使うことで、禁止対象について「公儀」を称する側の恣意的解釈を可能にしていた。今後、近世の「書かれたもの」統制、またそれと不可分な、口頭を含むふるまい・行為に対する統制を全体として問い、「公儀」の身分統制とは何だったかが問われる必要がある（『絵図の史学』）。

『近世政治空間論』では、これまでの政治史に関わる成果を踏まえて、複数の政治空間の衝突・交流・せめぎ合いとしての近世日本史像を提示し、また各時代の空間認識・世界観や、人と空間のかかわり方の変化に注目することで、各時代の主体とその行動・発想の特質を浮き彫りにする視点を提示した（UTokyo Biblio Plaza に、『Cartographic Japan』とあわせて、執筆者の立場からの紹介文を公開中。https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/ja/）。

「近代的海図」の問題は、出版をめぐる政治史的分析と海洋からの歴史の捉え直しという研究視角がクロスする位置にある。幕末期、幕府の統御の外側に、国際的な販売網をもった新聞などの出版物が出現する動きが近年明らかになりつつあるが、国家の統御のもとで国際的に流通した近代的海図は、そのなかでも、国家の戦略と密着した、海洋移動・陸地上陸に直接かかわる実践的な情報として独自の意味をもっていた。「海洋空間と情報の幕末史―海図と船艦の一九世紀」「「海洋知の再編と日本社会」ノート―史料と研究視角」で明らかにしたように、地球規模の海洋情報に、日本の各集団や個人が独自に参画する状況が生まれていた。戊辰戦争は、このような海洋情報のなかでの海戦が現実化したものだったのであり、そして、従来、明治新政府下における諸藩海軍の解体ととらえられてきた過程は、各「船艦」の持つ情報を集約し、海洋知を再構築する模索がなされていく過程として捉え直すことが可能だと考えている（『絵図の史学』）。

教授任用後発表した英文文献としては、前掲編著『Cartographic Japan』の他、以下のものがある（国際学会等の報告は、一覧に譲る）。

○『Monumenta Nipponica』に二〇一七年に掲載された「Shifting Perspectives on the Shogunate's Last Years : Gountei Sadahide's Bird's-Eye View Landscape Prints」。

○オックスフォード大学出版会から依頼をうけ、研究者レベルを対象に、オンラインで公開されているオックスフォード・リサーチ・エンサイクロペディアに掲載されている「Political Cartography during the Tokugawa Period」（二〇二〇年公開開始）。

○イギリスの Impact 社からオファーを受け、Ingenta Connect から「Analysis of History with a Focus on Space」と題した研究内容を公開している（二〇二一年公開開始）。

同じく、研究成果を生かし国外において行った教育活動として以下のものがある。東大―イエールイニシアティブ・レクチャー「近世日本の法と支配」（二〇一二年九月、イエール大学）、パリ第七大学における講義「風景画による政治表現」「変動期と歴史主体」（二〇一九年一一月）。

四・二　編纂・研究事業の自己評価

入所以来、維新史料第一室で『大日本維新史料　類纂之部　井伊家史料』（以下『井伊家史料』）に携わってきた。この仕事で扱う史料の多くは、大老井伊直弼や彼の腹心の部下が、政治上の必要から授受した手紙類やその草稿である。草稿類を史料集としてまとめるためには、抹消された箇所や推敲の過程を復元することを必要とする。後年の改竄跡（しばしば手紙のなかで不都合な部分を切りとったうえで、文意が続くように再接合している）を発見し、原型を探りだすのも重要な作業である。同時に、差出名や宛名を欠くものについては、筆跡や内容、敬語の使用状況や書記様式から、誰から誰に宛てたものであるかを確定し、また書かれた内容を他の歴史事象と照らし合わせていつ発信したものかを判断する。政治上の機微に触れた手紙であることから、当事者同士の隠語が使われ、またしばしば記述は断片的・暗示的であ

るが、その意味するところを解読していく。断簡と断簡を、実際に机上で突き合わせてみる作業等も必要であり、また複数の人物が関わった草案の改訂の場合、誰がどの部分を改訂したのか、どの順序で、中清書、清書へと整えられていったのかを筆跡などから推定したうえで、それを一旦消化して印刷版面にその経過が理解できるように再構成することも必要となる。また草案段階で検討されていた施策は、実際には実行されなかったものも多く、一般に知られている維新史の知識だけでは解釈できない事象も多い。こうした原史料との格闘の経験を踏まえて、諸分野での内容分析・物質的分析の動向を視野に、史料学をとらえ直した成果として「史料学の試み―『モノとしての史料』を問い直す」がある。

また、編纂にあたっては、直弼をはじめとする『井伊家史料』のアクターたちが、その時どこに居たのか、その場はどのような状況にあったのか、それによって彼らの行動がどのように制約され、またその発想にどのような影響があったのかを常に念頭に置くことが必要であった。こうした大老政治の舞台になった江戸城―江戸の問題は、「『井伊家史料』をよむ―江戸城普請の政治学」（二〇〇三年）、史料編纂所アフタヌーン・セミナー「政治の舞台桜田門外から江戸城を巡る」（二〇〇八年）において一般向けに解説し、「江戸城と江戸」（二〇一四年）を執筆した。これらの成果は、『近世政治空間論』の政治空間としての江戸城―江戸の位置づけに結実させた。

『井伊家史料』（全三十巻）は二〇一九年をもって半世紀に及ぶ刊行事業を完結した。現在は、①『大日本維新史料　類纂之部』シリーズの次書目の準備に当たるとともに、②『井伊家史料』のより有効な利活用を目指し、オンラインデータベース（史料編纂所「近世史編纂支援データベース」）の充実を目指した科学研究費「日本近世史料学の再構築―基幹史料集の多角的利用環境形成と社会連携を通じて」（二〇二二～二〇二四年度）の代表を務めている。紙媒体の史料集とデジタルデータ検索を組み合わせることの意義は、史料編纂所国際研究集会において「十九世紀大老文書の史料集刊行と電子索引公開」（二〇一九年度）として発表した。

教授任用後の所内運営としては、近世史料部門代表、予算委員長（いずれも二〇一八・二〇一九年度）などを務めた。同じく学内業務として特質的なものとして、東京大学海洋アライアンス連携研究機構に参画したことがきっかけとなり、文理融合の教育と研究成果発信に携わってきたことがあげられる。同機構による「海研究のフロンティア」シリーズの講義を分担し（二〇一五・二〇一六・二〇二〇年度）、シンポジウム「領土・領海と島嶼」（二〇一七年度）、シンポジウム「海域と島々―物語と歴史」（二〇二一年度）の企画・司会を担当した。また東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センター・海洋教育基盤研究プロジェクト（海洋学）において、「海洋知」プロジェクト代表（二〇一九・二〇二〇・二〇二一年度）として共同研究を推進した。

また二〇二一年度より、文化庁文化審議会専門委員（文化財部会）、同登録美術品調査研究協力者会議委員（文字資料等委員会）を務めている。

本郷和人教授自己評価書（二〇二二年六月）

一　経歴

生年　一九六〇年一〇月　東京都に生まれる

学歴　一九八三年　東京大学文学部卒業

一九八八年　東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学

職歴　一九八八年　東京大学史料編纂所助手

一九九六年　『中世朝廷訴訟の研究』で博士号（文学　東京大学）を取得

二〇〇〇年　東京大学史料編纂所助教授

二〇〇五年　東京大学大学院情報学環助教授を兼任

二〇〇七年　東京大学大学院情報学環准教授（職名変更）

二〇〇八年　東京大学史料編纂所准教授

二〇一二年　東京大学史料編纂所教授（現在に至る）

二　研究業績一覧

二・一　教授任用後の業績

〔著書〕（評価対象としてほしい本の冒頭に○を付した）

『戦いの日本史　武士の時代を読み直す』（角川学芸出版、二〇一二年）

『戦国武将の明暗』（新潮新書、二〇一五年）
『戦国武将の選択』（産経セレクト、二〇一五年）
『なぜ幸村は家康より日本人に愛されるのか』（幻冬舎、二〇一五年）
『戦国夜話』（新潮新書、二〇一六年）
『天皇にとって退位とは何か』（イースト・プレス、二〇一七年）
『真説戦国武将の素顔』（宝島社新書、二〇一七年）
○『日本史のツボ』（文春新書、二〇一八年）
『壬申の乱と関ケ原の戦い―なぜ同じ場所で戦われたのか』（祥伝社新書、二〇一八年）
○『上皇の日本史』（中公新書ラクレ、二〇一八年）
『日本史の新常識』（文春新書、二〇一八年）
『考える日本史』（河出新書、二〇一八年）
『軍事の日本史　鎌倉・南北朝・室町・戦国時代のリアル』（朝日新書、二〇一八年）
『承久の乱　日本史のターニングポイント』（文春新書、二〇一九年）
『乱と変の日本史』（祥伝社新書、二〇一九年）
『世渡りの日本史』（KADOKAWA、二〇一九年）
『怪しい戦国史』（産経セレクト、二〇一九年）
○『世襲の日本史「階級社会」はいかに生まれたか』（ＮＨＫ出版新書、二〇一九年）
『権力の日本史』（文春新書、二〇一九年）
○『信長「歴史的人間」とは何か』（トランスビュー、二〇一九年）
『日本史　自由自在』（河出新書、二〇一九年）
『空白の日本史』（扶桑社新書、二〇二〇年）
『日本史ひと模様』（日経プレミアシリーズ、二〇二〇年）
『日本史でたどるニッポン』（ちくまプリマー新書、二〇二〇年）
『誤解だらけの明智光秀』（マガジンハウス、二〇二〇年）
『歴史のIF（もしも）』（扶桑社新書、二〇二〇年）
『暴力と武力の日本中世史』（朝日文庫、二〇二〇年）
『ざんねんな日本史』（宝島社、二〇二一年）
『「違和感」の日本史』（産経セレクト、二〇二一年）
『「失敗」の日本史』（中公新書ラクレ、二〇二一年）
『戦国武将の選択』（産経ＮＦ文庫、二〇二一年）
『変わる日本史の通説と教科書』（宝島社新書、二〇二一年）
○『日本史の法則』（河出新書、二〇二一年）
『日本史の論点』（扶桑社新書、二〇二一年）
『日本中世史最大の謎！鎌倉13人衆の真実』（宝島社、二〇二一年）
○『北条氏の時代』（文春新書、二〇二一年）
○『日本史を疑え』（文春新書、二〇二二年）

〈共著〉

○『岩波講座日本の思想八　聖なるものへ』のうち、「王法と仏法」（岩波書店、二〇一四年一月）
『領域の歴史と国際関係』のうち、「総論」と「室町時代」（朝倉書店、二〇二一年五月）

〈史料集　共同編集〉

五味文彦・本郷和人・西田友広編『現代語訳　吾妻鏡』全一六巻（吉川弘文館、二〇一五年一二月に完結）

〈論文〉

「易しい教えと優しい政治」（『法然思想』〇、二〇一五年八月）

二・二　教授任用以前の主要な業績

〈著書〉

『中世朝廷訴訟の研究』（東京大学出版会、一九九五年四月）
『新・中世王権論　武門の覇者の系譜』（新人物往来社、二〇〇四年）
『人物を読む日本中世史　頼朝から信長へ』（講談社選書メチエ、二〇〇六年）
『武士から王へ―お上の物語』（ちくま新書、二〇〇七年）
『天皇はなぜ生き残ったか』（新潮新書、二〇〇九年）
『天皇の思想―闘う貴族北畠親房の思惑』（山川出版社、二〇一〇年）
『武力による政治の誕生　選書日本中世史　一』（講談社選書メチエ、二〇一

○年）
『天皇はなぜ万世一系なのか』（文春新書、二〇一〇年）
〔論文〕（上記、博士号著書に収録していない、主なものを記す）
「中世寺院の社会的機能についての一考察」（『史学雑誌』九五―四、一九八六年四月）
「『源威集』を読む」（『茨城県史研究』八〇、一九九八年三月）
「『満済准后日記』と室町幕府」（『日記に中世を読む』所収、吉川弘文館、一九九八年一一月）
「信濃源氏平賀氏・大内氏について」（『松本市史研究』一〇、二〇〇〇年三月）
「西園寺氏再考」（『日本歴史』六三四、二〇〇一年三月）
「後醍醐天皇親政への一考察」（『鎌倉遺文研究』八、二〇〇一年一〇月）

三　編纂・研究事業実績一覧

三・一　教授任用後の編纂・研究事業歴

〔編纂〕
『大日本史料』第五編之三十五（二〇一四年三月）
『大日本史料』第五編之三十六（二〇一八年四月）
『大日本史料』第五編之三十七（二〇二二年三月）

三・二　教授任用前の主要な編纂・研究事業歴

〔編纂〕
『花押かがみ』南北朝時代編の準備
『大日本史料』第五編之三十二（二〇〇三年三月）
『大日本史料』第五編之三十三（二〇〇六年三月）
『大日本史料』第五編之三十四（二〇一一年九月）
〔プロジェクト研究〕
「『明月記』『吾妻鏡』の写本研究と古典学の方法」（特定領域研究(A)、代表五味文彦）研究分担者、二〇〇一年度～二〇〇二年度
「『吾妻鏡』と中世都市鎌倉の多角的研究」（基盤研究(B)、代表五味文彦）研究分担者、二〇〇三年度～二〇〇五年度
「歴史史料と中世都市の情報学的研究」（基盤研究(B)）研究代表者、二〇〇六年度～二〇〇九年度

四　自己評価報告書

四・一　研究活動の自己評価

私は一九九五年に実証的な研究として『中世朝廷訴訟の研究』（東京大学出版会）をまとめて翌年に博士号を取得し、二〇〇〇年度に助教授に昇任した。それまでの私は「一年に一本」を目安に実証的な論文をまとめて査読つきの雑誌で発表することを目標とし、とりあえずはそれを達成していた。そして、それらを博士論文として著作にまとめ、万全の体制で世に問うたつもりだったのだが、自分の意気込みと手応えに反してこの本への学会の評価は高くなかった。そのため、二〇代からの努力にむなしさを感じ、方向性を完全に見失っていた。

そんな折、二〇〇一年一〇月、恩師である石井進先生が亡くなった。弟子一同で先生の著作集をまとめ、先生の学問とは何かを再考しているうちにあることに気がついた。先生は一九七〇年に主著である『日本中世国家史の研究』（岩波書店）を上梓した。時に三九歳であったから、私が主著をまとめたときとほぼ同じ年齢であったわけだが、そのあと幕府や朝廷など政治機構の分析をやめた。主著のテーマである国家史の研究を、少なくとも正面から研究のテーマとすることはなくなったのだ。

先生は主著の中で言う。この本で叙述したことがらは、恩師である佐藤進一先生から与えられた課題への自分なりの回答にすぎない、と。つまりは問題意識自体は自らの創案ではなく、佐藤先生にオリジナリティがある、と。私は長く、それは先生一流の謙譲の表現だと解釈していたが、案外そうではないのではないか、と改めて考え直した。

石井先生が若き日から柳田国男に私淑して、民俗学を学んでいたのは有名である。私たちが学生であった時期も、進んで現地調査に赴き、各地の郷土史研究者や古老の聞き取りに従事していた。社会の上層の変化を解析すれば、それはそのまま歴史の流れの理解に直結するという理解は誤りだ。歴史

学とは無名の人々の生活を丸ごと掬い取るべきものである。そう先生は考えていたのではないか。だから、朝廷機構から幕府組織へ、という国家史の主役交代を実証的作業を通じて慎重に跡づけ、主著をまとめたところで一区切りをつけた。それからは、本当に自分が研究したかったこと、すなわち文献史学を中心に、民俗学と考古学を援用しながら、文字史料としては残りにくい「中世人のありよう」を全体的に復元することを、積極的に推し進めていったのではないだろうか。

その観点に立ってみたとき、自分の中にある中世史学を考え直すべきだ、と私は感じた。自分は鎌倉時代の朝廷とは何かを、文字史料をもとに分析してきた。また朝廷を知ることによって、その変化と深く関係する幕府のすがたをあぶり出すことにも成功したと自負している。だがそれは、いわば社会のほんの上層のすがたに言及したにすぎず、中世社会の圧倒的多数を占める無名の人々の動向を明らかにはしていない。あらためて、中世とは何かを熟考すべきではないか。そうした問題意識を抱くようになった。

二〇〇五年、私は情報学環の兼任教員となった。望んだポストではなかったが、この移動も私の学問に大きな影響を与えた。それは①同僚の先生方からの視座。様々な学問の中で日本中世史を見直すことになった。②学生からの視座。情報学環は史料編纂所と異なり教育組織であるので、学生の教育が公務となる。また、情報学環は文理融合の組織であるため、様々な分野を研究している学生たちが集まっている。こうした学生たちが日本中世史という学問をどう見て、どう評価しているか、を感得することにより、日本中世史を見直すことになった。③社会からの視座。情報学環は全体の学びの中枢として社会学を置いている。そのため、社会とのつながりをとくに意識する組織である。社会の視線を強く意識することにより、日本中世史を見直すことになった。

①であるが、様々な学問が懸命に自己アピールに努力していることに感銘を受けた。現代では「反知性主義」とまとめられる、形而上学や基礎学問の軽視、実学偏重の方向性はすでにこのとき始まっていた。その中にあって、伝統的諸学問は積極的に自己をアピールしなければ、その価値は埋もれてしまう。わざわざ向こう岸から学問の尊さに差し伸べられる手は存在しない、と覚悟すべきであることを実感した。

②であるが、学生たちの歴史学軽視の傾向にほとんど絶望する思いであった。知的な本学の学生たちが、歴史学を学ぶ価値のないものと断じている。中等教育と受験を通じて、歴史的事実ならびに事象の暗記を強いられてきたのだろう彼らは、「考えること」を尊しとする知性にあふれた学生であればあるほど、歴史学は「覚える」学問であるゆえに、研究に値しないと考えていた。実益云々を議論する以前に、歴史学は多数の学生から相手にされていないことを痛感した。

③であるが、学問の中で不人気でありながら、歴史というジャンルそのものは、社会では一定の需要があることを発見した。一九九八年、パリに始まった哲学カフェの影響を受けて、初めてのサイエンスカフェが、英国リーズで開催されたことは有名である。一般の人々に学問としてのサイエンスをわかりやすく、というこの仕掛けは、社会的に認知され、世界中に広まった。研究者層の厚い科学については、日本でもサイエンスコミュニケーターという人々が活躍している。サイエンスカフェの成功、サイエンスコミュニケーターの活動。歴史学においても、ヒストリカルコミュニケーターのような存在が重要なのではないかとの感想をもった。

二〇〇四年、石井先生の仕事を全集としてまとめ直す作業（『石井進著作集』岩波書店と『石井進の世界』山川出版社）に加わりながら、自身の著作として『新・中世王権論』（新人物往来社）をまとめてみた。私の博士論文をもとに、読みやすさを心がけてまとめたものであったが、これを読んだ何人かの編集者から新しい著作を、と声をかけられた。彼らとの共同作業を経て、どうしたら社会に受容されるか、日本中世史の大切さと面白さを伝えられるかを考え続けながら、今日に至っている。これは教授に昇進した後も変わっていない。また、テキストをダイレクトに社会に問いかける試みとしては、『吾妻鏡』現代語訳のプロジェクトにも関わった。

暗記中心の学習スタイル故の若年層の歴史離れ、反知性主義の定着からもたらされる伝統的文系諸学問の地盤沈下。これらゆゆしき事態に、残念ながら歯止はかかっていない。いや、それどころが、こうした動きは加速しているように感じられる。何とかこうした趨勢に対処したい。私の教授任用期間

の仕事は、それを目的としたものである。

さて、そうした観点に立って私の著書を見てみたい。私の問題関心は、①歴史の実情を探りたいということである。たとえば教科書には、日本初の銭貨として和同開珎もしくは富本銭が記述されている。だが、これは正しい理解だろうか。銭貨は社会に流通してこその銭貨である。だが、和同開珎や富本銭が人々に広く使われたとは考えられない。古代社会に貨幣経済が十分に浸透していたわけではないのだ。にもかかわらず、和同開珎が製造されたことのみを教科書に記述し、しかもそれを覚えさせる授業が行われている。ここには大きな問題がある。

こうした「〜であるべきだ」的な、当為を重んじる歴史理解は現在広く行われているように感じる。社会上層ではなく、社会の多くの構成員に注目したときに、教科書的な歴史解釈はどこまで変わるのか。私の著書は、当為でなく実情、「〜であった」を重視して書こうとしている。

もう一つの問題関心は、②歴史事象を流れの中に捉えたい、ということである。近年の「最新の学説」といわれるものを見てみると、狭い範囲でのみ叙述されているものが多い。たとえば一二二一年の承久の乱において、後鳥羽上皇は「北条義時を討て」と命じているが、これを以て上皇は北条義時一人を討てと言っているのであって、武家政権を否定していない、と説くが如きである。この解釈に対しては、鎌倉時代全体の政治史、古文書学を参照すると、直ちに反論が想起できる。史料は限定的に見るのではなく、広い視野で読むべきである。

問題関心①②をよく示すことができたと思われる著書に○を付した。評価の際に考慮いただければ幸いである。

四・二　編纂・研究事業の自己評価

私は史料編纂所に入所してから、特殊史料部、中世史料部、古代史料部で仕事をしてきた。特殊史料部では『花押かがみ』南北朝時代編の出版に向けての準備に従事した。その後、中世史料部で大日本史料第六編の編纂作業に少しだけ関わった後、古代史料部に移籍して大日本史料第五編の編纂に当たった。編纂作業に従事する際、先輩たちから多大な助力をして戴いたことに感謝したい。とくに五編の上司かつ先輩であった近藤成一氏への感謝は言葉には尽くせない。記して謝意を表する次第である。

プロジェクト研究としては、五味文彦先生の『吾妻鏡』についての一連の研究に参加し、研究代表者も務めた。これらは『現代語訳　吾妻鏡』（全一六巻）として広く世に問うことができた。

大日本史料第五編は、今のところ網羅主義を採っている。これが妥当であるか否かは、検討の余地があるように思う。確かにどんな文字史料も活字にしておくことが望ましいことは疑いがない。だが、例えば東大寺の僧侶のノートは、分量が多い上に、内容がきわめて難解である。私たちは歴史研究者としてのトレーニングは積んでいるが、仏教研究者としてはほとんど素人である。にもかかわらず、東京大学文学部の印度哲学研究室ですらもてあますほど難解な仏教のノートすべての活字化に挑戦すべきなのか。もちろん宗教史、美術史、建築史、社会史などもすべて「歴史」であるわけで、それらすべてを習得した上で理想的な編纂をするのが理想であるとは理解するところだが、「効率の悪さ」「畑違い」という感覚がどうしてもつきまとう、というのが実感である。この点、なお考えていきたい。

これに付随して触れておかねばならないのが、第五編の立ち位置である。第五編は古代史料部に所属しているが、対象とする時期は鎌倉時代。通常は中世に分類されて然るべきである。もちろん、史料編纂所の制度設計から鎌倉時代は古代になっていることは承知しているが、史料の扱いを中世史料部全体で考えねばならないときに、五編は参加できない。また『正倉院文書』などの古代史料について語るとき、私たちは中世史研究者であるため、状況が良く理解できない、また、発言を遠慮する、という事態が多々あった。先に述べた網羅主義の採否などのきわめて大切な問題も、中世史料部として議論したいと考えても、受け皿がない。この点も考えていかねばならない課題の一つであろう。

さて、中世史研究を遂行するさい、典拠となるものは何か。それは私たち史料編纂所の根幹ともいうべき文字史料である。これに依拠することが実証的な歴史研究の基本となるし、それゆえに史料編纂所の価値は揺るがない。だが、それだけなのか。文字史料の翻刻に従事するうちに、また、四・一に

述べたような問題意識を有する者として、私は異なることを考え始めた。

史料に基づいて史実を復元する。ただし、いかに日本には豊かな史料が残っているとはいえ、すべての史実を復元できる、というわけではない。とくに文字を日常的に用いることがない社会の中・下層に位置する者たちの動向を知るには、実は有限な史料を解釈するだけでは足りない。

そこで歴史を語るときに、研究者は想像力や洞察力をもって史実を超える史像を形成する必要に迫られる。多くの史実から帰納的に方向性を抽出し、それをさらに演繹的に駆使して史像を構築する。この作業自体が論理的な典拠になるのではないか。私はそう考えた。史像がいかに適合的か、どれほど応用できるか。かかる観点から優劣を競い合うことにより、歴史学は「考える」学問として再生できるだろうし、史像を抽象化すれば、社会に訴えかけることも容易になる。

このように考えた結果として、私は正直なところ、『大日本史料』の編纂に以前ほどの情熱を持てなくなってしまった。本来なら職を辞して他の道を模索するべきだが、歴史学自体には余人に負けないだけの情熱があり、また歴史学全体の衰退に起因するポスト減があり、実現に至っていない。猛省すべきであろう。

実証という問題についてもう少し述べると、現状では、哲学・文学・歴史学など伝統的諸学問における科学的研究の中心に位置するのは、やはり文字史料の操作、テキスト論になるだろう。史料1と史料2と史料3の相互関係であるとか、史料の原型を模索する試みであるとか、それらは確実に科学的、実証的であるがゆえに伝統的文系諸学問に従事している研究者たちから高い評価を獲得しやすい。それは言葉を換えると、こうした研究のプロジェクトを組めば、共同研究として研究者相互のチェックを通過したうえで、しかるべき公的機関からの援助を受けやすい、ということになる。

こうした研究プロジェクトを遂行することは、学問の自己アピールそのものであり、それは研究の発展に直結する。史料編纂所は、こうした既存の科学的・実証的な研究に従事する優秀な研究者を多く組織している。そう考えたとき、また『吾妻鏡』プロジェクトに参加した結果として、私は自分がプロジェクト研究に適合的ではないと気づかざるを得なかった。一つには、私は飽くことなく史料を操作する熱意を持っていない。またもう一つには、これはさらなるわがままであると自覚しているが、私は実証的歴史学の可能性自体こそを広げてみたい。このため、私はこれまで、ほとんど研究プロジェクトに加わっていない。

もう一点、付言しておきたいのはＩＴ技術との関係性である。いまやＩＴは急速な進歩を遂げ、これなくしては社会は成り立たなくなっている。伝統的な文系学問である歴史学も同様で、私たち史料編纂所は、学問を広く社会に開くために種々のデータベースを構築し、実績を積み重ねてきている。だが、私は、これは単なる好みの問題になるが、この方向に背を向けて今に至っている。これは私に理系の考察力が全くないこと、同じく社会に働きかけるなら、先述の史像の形成にこそ注力したいと願ったためである。